

フィリピン・ネグロス島における就学前教育に関する一考察(1) —幼児の心身の健康の視点から—

夏 目 恒 雄
飯 田 和 也

はじめに

“今、何故フィリピンか”という疑問があるが、いたって簡単である。フィリピン共和国の情勢に詳しい本学教授の飯田和也氏の誘いの中で、附属幼稚園の園長の役割を終える直前に、フィリピン共和国の教育事情の視察と、氏との計画の中にあった、貧困の中に取り残されている子どもたちの思いが募り、教育への有形無形の支援であった。

我が国の子どもたちおよび、私どもの附属幼稚園の子どもたちは、経済的に恵まれ、両親に恵まれ、豊の内に生きていることを、5年間の附属幼稚園園長を兼務する中で確信した。そして、学院や彼らは、私ではなく他を必要としていると確信した。そんな中で、私を必要としているのは少なくとも押しつけの感はあるが、ネグロス島の一角に取り残されている幼子であることを感じ、残りの時間を彼らの為に仕えることを決意したからである。

このようなフィリピン共和国との接点であるが、今更ながらに“カルチャーショック”というものを思い知らされた。我々が、いかに日本の経済活動の中での手続き論を、いかにも人間の常識として捉え、それに従うことを善として受け入れてきたことに大きなショックであった。これは、フィリピン共和国ならず、アフガニスタンの難民に代表される国々の難民の実態や、そこに働くNPOやNGOの協力者たちは、その事実を実体験として持ち、その中で活動していることと比較すれば、その比ではない。しかし、そこに我々を必要とする幼子や仲間(教師)がいるということも事実である。

こうした中で、教育支援としての活動を展開し始めると、子どもたちの生活の実態を明らかにし、更に、国家の将来を担う子どもたちの、心身

の健康に関する教育の取り組みの実態を明らかにすることが重要にして、必要な支援であると考えられた。

そして、そのような中で、子どもたちの教育や保育を取り巻く環境や、教育(保育)の内容を活動プログラムを通して、幼児の心身の健康の配慮(教育的位置付け)の実態を明らかにしようとするものである。

I フィリピン共和国の歴史と教育

1 フィリピン共和国概要^{1) 2)}

我が国、日本国は近年においてアジアの諸国との関係を改善し、より良いものとすべく様々な機会に、様々な方法によって国や国民のレベルで改善の努力がなされてきている。2002年6月には、サッカーのワールドカップが、華々しく開幕となり、日本は歴史的という表現の中で決勝リーグへのチャンスを手にした。このワールドカップは、韓国と日本の共同開催となり、日韓の関係も新たな方向を模索し始めたといっている。

日本とアジア諸国との関係は、先の大戦を通して好ましくない関係へと発展していった事実がある。このフィリピン共和国(以下フィリピンとする)においても、その関係は同様であった。

そして、この国のことを語るときには、歴史的な背景となるが、1565年から1858年の300年余のスペイン統治時代があり、ここでは宗教教育が中心となって実施されてきたが、アメリカの統治(1901～1941)になってからアメリカ的な教育スタイルに対して、過去の日本国と同様に、それを歓迎してきた。

このアメリカの導入した教育政策によって、格段の識字率(93.9%)となっていることも事実であり、また、就学者数の増加にも寄与しているということである。^{1) 2) 3)}

このような現状を眺めると、アジア諸国の中にある、教育に力を入れる国の政策が感じられる。

先の大戦時においては、アメリカの統治の中で大戦下、一時的に日本の統治時代が1942年から1945年の数年間に及んだが、フィリピンは、スペイン、アメリカ、そして日本と長期に渡って植民地支配の中におかれた国であることから、言語、文化など様々な視点から眺めても、一国にして一国を語ることでできない多くの問題を抱えていると想像できる。

フィリピンと聞くと、我が国においては、先の大戦を通しての、統治下の我が国の愚考・愚挙の数々を歴史の事実として知識の上で知ることと、今日の平和な社会にあって、経済大国といわれてきた時代の流れの中で、海外渡航の便利さに相俟って、統治下と同様ではないが、それに比類する日本人観光客の、様々な愚挙が批判の対象となったことは忘れられない事実である。しかし、それとは逆に、フィリピンの地理的位置、また、教育の実情そのものは、余り知られていないのが現状ではないかと考えられる。

一口にフィリピンといっても“フィリピン共和国”として、7000余の島々からなる島国であるということ。この島については、ミンダナオ島、レイテ島、首都マニラの位置するルソン島が歴史に馳せる島々として知られている。そして観光地としてのセブ島。環境問題や貧困や経済問題の中でネグロス島という数島を知るにすぎない。地図を広げても、そのほとんどを確認できないような様である。

言葉を始め、民族、文化、宗教において多様性を、この国の特徴として挙げることができる。この複雑なフィリピン社会は、大地主や資本家の経済的支配が中心となった貧富の差を顕著にした社会である。

経済的な貧困層の国民の子どもたちは、勉強についていけない、学校に着ていく服が買えない・靴が買えない、上着ばかりか下着も手に入らない、教科書も買えない、兄弟姉妹の面倒を見なければならない、大人の替わりに経済的活動を強要される(地域によって、想像の付かない様相と、その差を見せる)等様々な理由によって、彼らの学

校との関係は、日本の子どもたちの抱える学校、あるいは教育との関係とは比較にならない諸問題を抱えている。

我が国において、今日の大きな、そして複雑な問題とされる、児童の虐待、家庭内暴力、いじめ、児童生徒の性的搾取、薬物使用の青少年や一般家庭への浸透等の問題も、フィリピンの貧困層の国民においては、特に新しい、特殊な問題でなく日常の慢性化した問題である。そうした彼らの経済的貧困を基にして、多くの子どもたちが、その犠牲となっている。こうした状況の中で、学校および教育に関しては、政府の開発政策は国民の生活実態との乖離は言うまでもないものであった。当然ながら、この開発は特定の人々に利益をもたらすものとなり、真の開発には至らなかったことは、同国の現政権下の政治経済情勢の報道を見聞きする中で容易に想像できる。

2 植民地統治下の教育

(1) スペイン統治時代の教育

フィリピンは、1571年にスペインの統治が始まり、植民地化の大きな目的としてキリスト教(カトリック教派)の布教が展開された。東南アジアの特徴的な木質系の簡素な教会も、荘厳さを持たせたバロック様式の堅固な教会が建築され、今日においても教会の多くはバロック様式といわれている。このことは、統治者であるスペインは東洋に中世のスペイン都市を築くことを目指していたともいわれている。更にスペインの統治は他の植民地である、メキシコの統治を経由してフィリピンの統治が行われたという点から、メキシコ文化、またメキシコ文化化されたスペイン文化の影響を受けることになった。^{4) 5)}

教会の建築様式が西洋化し、そこに置く家具作りが盛んになり、スペイン僧侶に技術を教えられた。職人の多くが、中国人であったことから、中国風のデザインが多く観られた。また、教会の建築と並んで、カトリシズムを広めるために、カトリック僧侶たちが、芝居好きな国民性を利用して、舞台を通してキリスト教を布教していった。

その代表的なものに、キリスト教徒の王子(または王女)とイスラム教徒の王女(または王子)の恋物語で、異なる宗教観の中で両家の争いへ発展

し、最後にキリスト教の正しさに気づき、イスラム教徒がキリスト教に改宗し、二人は結ばれるという芝居である。⁶⁾そして、セナクロ（復活祭に上映される宗教劇）があり、これは、セナクロに登場するキリストは、だれにでも寛容で、ひ弱な柔順な像として描かれ、これを通して、植民者に対して反抗しないフィリピン人像が作り上げられていくことになった。⁷⁾

村の子どもたちの教育については、僧侶たちがおこない、彼らは教会の付属小学校を建設し、ここでは、読み、書き、算数を教え、そして宗教も重要な教育の内容であった。僧侶たちは、村の支配者であり、本国に対しては通訳であり、植民地社会の中で絶対的な地位を築いていった。そして、この付属学校も18世紀においてはかなり普及し、多くの町に教会付属の小学校が設けられるようになった。

19世紀末になると、フィリピンの経済的発展によって、フィリピンの裕福な家庭の子弟がヨーロッパへ留学し、ヨーロッパの自由・平等の精神を伝え独立の運動が激化してきた。しかし、アメリカの登場によってフィリピンは新しい支配統治が始まることになった。⁸⁾

(2) アメリカ統治下の時代の教育

1898年にスペインから統治権を譲り受け、ここにアメリカの植民地教育が展開することになる。アメリカの対応は武力による統制後に、軍人による村の統治が始まり、教科書による教育が展開される。

アメリカは自己の支配を「慈恵的同化」、「原住民の保護」やスペインの行なった専制支配を正義と権利による寛大な統治に代える」など、宣伝を試み、1900年には、マッキンリー大統領の訓令によって、植民地経営の基本方針が明らかにされた。そこでは「アメリカは、支配の基礎に法の支配と個人の自由を置く」とし、フィリピン各地に自治体が設けられ、国政レベルでの議会も開設された。⁹⁾

これは、日本の過去の大戦の中での状況と酷似し、自由と民主主義の名の基に、公教育として無償の教育が展開された。日本においては、教科書の検閲ということで、教授内容がかなり制限され

たのですが、教育そのものは、日本人の手によって日本語による教育が展開された。しかし、フィリピンにおいては、教師はアメリカから派遣され、教育は英語で実施され、当然ながら教科書はアメリカ製のもので、内容も当然クリスマス、サンタクロース、リンカーンのゲッティスバーグの演説などで、教室にもアメリカの大統領の肖像画あり、学校ではアメリカのことを学習することが中心であった。即ちアメリカ的教育を展開し、それがフィリピンの国民に支持され、発展していくことになった。

図1に示されるように、フィリピン国民に支持され、発展していったと考えられる教育であったが、図2に示されているように、就学者数は第Ⅱ、第Ⅲ学年において急激に減少してきている。このことは、この期の学年において、中途退学者が急激に増加しているということである。こうした状況の中で、教授用語となっている英語の学習ができないで中途退学ということになり、同国におけるアメリカの、アメリカ式の教育政策が、広く国民に普及してはいかなかった。この教育は、今日にも影響を及ぼしているが、高等教育を受けることのできる、特定の国民の子弟が中心になるといわざるをえない。¹⁰⁾

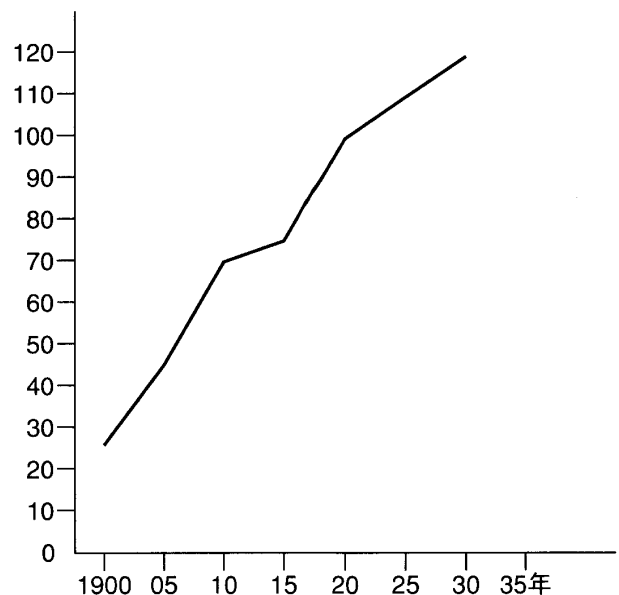


図1) アメリカ統治時代の初等教育就学者の推移

資料 Unesco Philippine Educational Foundation. Fifty years of education, p.93 より作成されたものを「アジアの文化と教育」より転記

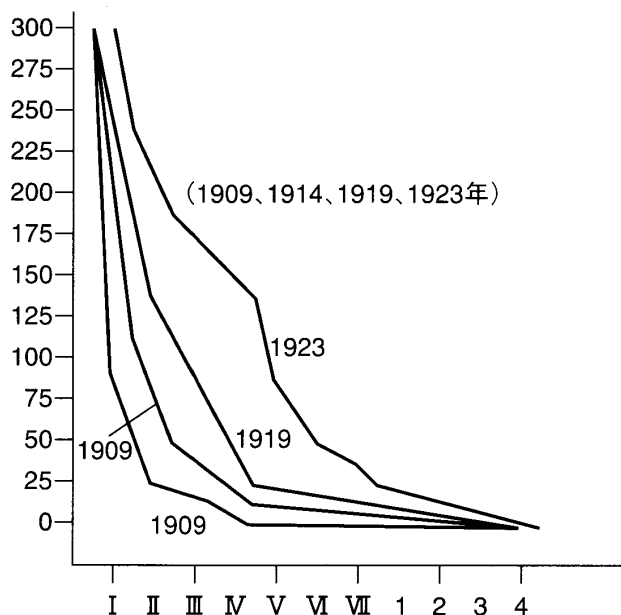


図2) 各学年段階における就学者数

資料 A Survey of the Educational System, p.20
より作成されたものを、「アジアの文化と
教育」より転記

また、普通中等学校が各地に設置される中において、職業中等学校は、農業国としての国情から職業中等学校の需要が無く、なお一層の植民地的支配の中に問題を発見できないでいたといえる。

このように考えると、フィリピンの教育はエリートのための、エリート養成教育であるといっ
てよい。

1946年アメリカからの独立によって、教育もフィリピン民のものになり、ここでは多くの問題を含みながらも、第一に教育内容のフィリピン化が挙げられ、初等学校の第一学年から社会科を導入し、国旗の掲揚等によりフィリピン人の育成が始まった。そして、第二に教授用語は基本的には英語とし、国語にタガログ語を採用。また、1957年には、初等教育の一学年、二学年では土着の各地方語が教授用語として取り入れられることになった。そのために、フィリピンでは初等教育の段階で英語、タガログ語、地方語の三つの言語を学習することになった。¹¹⁾

こうした、教授言語、生活言語、教科言語等として、複数の言語によって教授されていく状況の中で、この言語の学習が、前述の中途退学者の急増など、教育上の大きな問題を引き起こしているとも言える。

図3 学年別の教授用語と言語教科

権藤與志夫・弘中和彦編「アジアの文化と教育」中、
中里彰著「脱植民地過程における教育の問題」より

学年	教授用語	言語教科
6	英語 タガログ語（補助）	英語 タガログ語
5	英語 タガログ語（補助）	英語 タガログ語
4	英語 土着語（補助）	英語 タガログ語
3	英語 土着語（補助）	英語 タガログ語
2	土着語	英語 タガログ語
1	土着語	英語 タガログ語

II 今日のネグロスにおけるデイケアセンターの働き

（１）デイケアセンターの働き

フィリピンの教育について考えるときに、当然であるが国の文化、政治経済等が大きく影響していることから、フィリピン共和国の概要と植民地時代の流れについて簡単に眺めてきた。これはフィリピン共和国にあっては、長期に植民地支配下において、複雑な様相をもっていた。

そのような中、特にネグロス島におけ、農村地域（バコロド市）および、経済的貧困層（モロカボッカ島）の子どもたち、中でも就学前の子どもたちの教育が実施されているデイケアセンターの働きに目を向けたい。

デイケアセンターでの就学前児に対する保育の任務また、その機関は、国の開発サービスを通して社会福祉と市民の生活環境の改善および向上をめざすというものである。

具体的には、保育サービスの目標を達成するために、フィリピンの憲法にて、子育てにおける親の義務を助け支援すること、そして、子どもを国の最も重要な資産の一つと認め、共和国は、子どもたちの保護のためのプログラムを実行するために、あらゆるバランガイの保育所の設立に備えるものとしている。さらに保育部門の実現を高め

るために、あらゆるバランガイをカバーし、より広い範囲でのサービスを実施しようとしている。しかし、保育関係者によって大変な努力がされているが、必ずしも十分といえない。

この不十分さは、我が国の教育政策、あるいは福祉政策における国民のニーズと比して、大変な差異をもつものである。

我が国においては、教育基本法に則り、すべての国民が等しく就学の機会が保障され、その整備が整っているが、その比に及ぶものではない。ただし近年においては、乳幼児を取り巻く子育てや、家庭の状況が大きく変化する中で、新たな保育政策、教育政策を求められているが、基本的な政策としては、今日の発展した我が国の姿を眺めると、すべての国民に保障された教育の担うところが大きい。

しかし、バコロド市のデイケアセンター（保育所）は、粗末な園舎や、園舎の保育環境が十分でなかったり、あらゆる教材、教具が不足している状況の中で、保育者の手作り教材や廃物利用が、そのほとんどである。その中で献身的な活動が展開されている。また、子どもたちは、デイケアセンター（保育所）に登園するための十分な衣服もなかったり、お弁当も十分ではない。

戦後生まれの著者の印象であるが、映像や資料で目にする終戦後の混乱と、貧困のなかに放置されている子どもたちの姿、そのものであるといつてよい。



バコロダ市のデイケアセンターで折り紙を教える本学学生と担任教師

こうした、農村部の経済的に貧困な地域の子どもたちは、あらゆるものが不足する状況での生活

を強いられ、そのために様々な問題を、この期の子どもたちは同時にもっている。

それは、子どもたちの栄養の問題、発達・発育の問題、そして、放置されたり、搾取されている子供たちの問題があげられるが、それらを含めて考えることが、乳幼児期の子供たちの健全な成長と共に必要である。そして更に、そうした乳幼児を取り巻く様々な環境となる、大人の生活環境の改善と、その環境の整備が保育に関するミッションである¹²⁾といえる。

(2) デイケアサービスの必要性

ネグロス島バコロド市の各デイケアセンターでは、基本的な指針としては『Self-Instructional Handbook for DCW』¹³⁾に示されている内容を純粋に受けとめ、それを守るという方針で進められている。また教材の準備、環境の設定などについても、多くが同一のものとなっていて、独自性に欠けるという評価もできる。

そのような中で、このDCW¹⁴⁾のためのハンドブックに於いて、デイケアサービスの必要性について、次のように示している。

Sec.1.1¹⁵⁾

6歳になるまでの躰の仕方、質によって、彼らがどんな青年・大人になるかが決定する。その子どもにケアを与えることは両親の一番基本的な義務である。しかし、多くの両親は子どもに適切なケアと家庭環境を与えることができない。このような状況の中の子どもたちは、常に親に気に掛けてもらえなく心を傷む、それは将来において社会的不利な子どもになる。

とし示して、我が国と同様に、幼児期の子どもは、両親によって保護され、健全に育つために必要な家庭の環境を準備されることが不可欠であることを示している。

そして、子どもが無視され、放置される理由について幾つかの事例を示している。

*働く母親（もしくは、父親のいない場合）

母親というものは、伝統的に就学前幼児にとって、学習の教材のようなものであり、彼らの経験を豊にしてくれるものである。このよう

な母親の姿は、家庭にいる母親とか、子どもの世話が楽しい母親、適切な子育ての仕方を知っている人たちに当てはまることである。しかし、ほとんどの母親は生活のために外で働き始め、あるいは、母親が一家の大黒柱である場合もあり、母親は仕事に家事に忙しくて、就学前の子どもの面倒まで手が回らない状態である。ほとんど子供は家に一人でいるか、年上の子供に面倒を見させたり、近所に頼んで世話をしてもらっている。このような状況では楽しんで世話をしないことが多い。また、周りに世話をしてくれる人がまったくいないときもあるようである。

* 大家族の場合

子どもの数が多い母親は（働いていなくても）赤ちゃんや、２才以下の子どもを優先しなければならないために、子ども全員に注意を払うことができないこともある。そのために年上の子どもたちはしばしば、放置されることがある。

* 若い両親の場合

何人かは大変若いうちに子どもを出産して、感情的にもまだ未熟で、親としての責任も足りない。また、子どもの頃虐待されて育った親は、自分の子どもをどのように扱ってよいかわからず、就学前の子どものケアができない。このような親は、子育ての適切な方法を学ぶ必要がある。そして、彼ら自身が成長できるように支援したり、カウンセリングを受けたりする一方、彼らの就学前の子どもたちの世話もきちんと計画されるべきであろう。

* 貧困の場合

スラム街、遊ぶ場所のまったくない仮住居に住む人々は、一般的に子どもの世話が適切にできない。そのような環境の子どもたちは、よりよい周りの環境が必要である。たとえばデイケアセンターなどである。

と示され、これらの事例は特殊な事例でなく、自国の就学前の子どもの置かれた大変厳しい現実があることを示している。特に市街地から離れた地域、さらには農村部、山村部にいたっては、こ

の現状は、特殊な子どもや、特殊な家庭の状況でなく、大半がこのような状況にあるのが現状である。そのことを考えると、そうした状況であるから、バコロド市のデイケアセンターでは、そのような親の子どもたちに発達の手を与えているといっても過言でない。

こうしたことからDCS¹⁶⁾は、

肉体的、精神的に子どもの世話ができない親に代わって、子どもたちの運動能力、学習能力、健康教育を促すサービスを提供するのである。さらにセンターでは、乳幼児期を豊にする活動を指揮する以外に、子どもを無視することや虐待の兆しをチェックするという重要な役割をもっている。

また、Growth Monitoring Activityにおいて;例えば、予防接種での病気予防、早期発見、トリートメント、浄化と健康な習慣の促進などによって、小さな子どもたちの栄養失調や成長の妨げ・発達の問題などに取り組んでいる。

このような取り組みを眺めると、乳幼児のあらゆる生活部面に関する、あらゆる事柄について親に代わって支援するという大切な役割を担っているといえる。特に我が国のような、保育に欠ける子供たちを対象とする措置からの対処ではなく、地域の子供たち全てを対象にし、更に彼らの地域社会を含め、全ての住民を支援するのが、まさにバコロド市当局の政策であり、そのようにせざるを得ない現実が市の態勢をしめているといつてよい。

子育てを放棄する両親や、子供たちに労働をさせて怠ける両親（労働意欲のない両親）に育てられるという、大変驚くべき現状の中での活動が、ここでのデイケアの大きな役割であり、将来において子供たちが、そのような親にならないように、公の施設において適切な教育がなされ、豊かな人間教育を実現すべく活動を充実・発展させようと試みている姿がハンドブックおよび、実際の現地視察におけるフィールド観察からも知ることができる。

（３）デイケアサービスの歴史¹⁷⁾

教育支援の会として調査に入ったネグロス島

バコロド市における現状の中から、ハンドブックにおいて示された、デイケアセンターの必要性と現状の観察とともに眺めたが、このようなデイケアの必要性が発生した歴史は、以下のようなものである。

Sec.1.2

就学前の子どもたちのためのDCSは、はじめ社会福祉局のフィリピン都市社会福祉計画の基に創設され、1964年 UNICEF—Assisted Social Services Project の一部であった。初めのデイケアセンターは、社会福祉計画と共に編成され、同時にDSCは、就学前の子どもたちの発達に焦点を置いて取り組んだ。

1970年代、デイケアセンターで、サービスを受ける子どもが増えていることが明らかになり、1972年に栄養失調の就学前の子どものために栄養補給もサービスの一部門に加えられた。それは671カ所におよんだ。

1975年までには各地域の政府は、各自の地域にデイケアセンターを設立する後援を増やし、3390カ所のうち2106カ所は地元政府によって支援された。同時に、一日を通して家族や血縁者などにも世話をしてもらえない子ども達のために、デイケアサービスを提供する「Child and Youth Welfer Code」も設立された。1978年バランガイ・デイケア法は施行され、全てのバランガイのデイケアセンターの設立に利用され、放置される就学前の子どもたちのためのデイケアセンターを創立するという責任を地域社会に与えた。

このバランガイでのデイケア法は、バランガイ同士の競争や、地域有力者の力関係においても各地域で発展していくことになる。そしてバランガイにおけるデイケア法が施行されたことで、7000余に及ぶ島の各地域の環境として、バランガイは、地域コミュニティとしての役割を色濃く表している。

1978年から1983年にかけて、First Country Program for Children (CPC) が始められ、ユニセフを通して、フィリピンの子どもの発達センター (the Philippines Child Development Centre) 大学によって、数ヶ所で予備テスト

(Early Childhood Enrichment Program (ECEP: 保育改良計画)が行われた。最終的には、0～6歳児の不適切な感情的、社会的、知的発達の見直しである。このECEPの調査から以下のことは分かった。

1. 保育の改善の方針や、方法の知識と技術の最新情報を取り入れることは必要。
2. 刺激的な創造性のある環境作りによって、家族の子どもに対する役割の改善が必要。
3. 適切な教育方法・学習方法と遊び道具が与えられるべきである。

という結果であった。実にこのことは、今日の我が国における幼児期教育の中で、必要な諸問題と類似するものであるといえる。

そして、1983年から1987年にかけて、Second Country Program For Children (CPC2) は、これらの必要性を改善することを目的としてスタートした。ECEP (Early Childhood Enrichment Program) 2 は、選ばれた労働者のトレーニングも含んでいた。

その内容は、

子どもの成長について、0～6才の子どもの特徴、保育改善計画の原理とテクニック、また歌、お話、詩、絵、工作、ゲーム、遊び、その他の教材等の使い方、知識を与えた。それらの目的は、精神的発達、言語能力、社会や精神の価値、子どもの心身の健康の改善であった。

(4) デイケアサービスの目的¹⁸⁾

ハンドブックに示される、デイケアセンター(保育所)の目的は、放置されたり、虐待を受けたり、大人に利用されたり、見捨てられたりしている、0～6才児に補助的な世話を供給することであるとされている。そして、具体的に次の6つの目的をあげている。

1) 身体発達について

就学前の子どもが、身体的に健康で、適切な世話、栄養、成長の記録や病気の早期発見、体調改善のための様々な遊びやゲームを取り入れる。

2) 個人能力の発達について

服を着る、食べる、寝る、トイレ訓練等の活動を通し、就学前児の自我の発達、自己実現、自

己制御の発達を援助する。

3) 人間関係の発達について

お話を読んだり、散歩したりすることや、物を共同で使うことで、親や兄弟、友達、その他の関係する人々と良い関係をもてるように援助する。

4) 創造力と分析能力の発達について

美術、工作、音楽鑑賞やその他、創造的活動を通して、就学前児の精神的・知的・言語の発達を援助する。

5) 精神と社会的価値の発達について

家族、地域、文化、社会に対する積極的な態度の助長に加えて、フィリピン人であることに對する誇りを身につける援助。

6) 快適さと安全性の供給について

就学前の子どもに快適さと安全の提供と無視や虐待、搾取等から保護する。

Ⅲ デイケアセンターにおける子どもの健康生活支援について

(1) ネグロス島バコロド市の現地調査に見られる保育内容から

フィリピン社会は、富める国民（地域）と貧困にある国民（地域）の両極端が目の前に同居する国であるといつてよい。

今回は、貧困な地域に居住する子どもたちの保育から、日本の保育環境や保育方法を見直すきっかけが与えられた¹⁹⁾ので、特に貧困な地域に居住する子どもたちのためのデイケアセンターの働きを通して、特に心身の健康という側面から保育内容を考察する。

ここ、ネグロス島では、デイケアセンターにおいて、子どもたちの保育が実施されている。我が国においては、この名称では高齢者の施設という印象を与えるが、就学前の子どもは、毎日の生活、あるいは発達・発育にとって必要なあらゆることがらの一つ一つを、このセンターにおいて経験し、身につけていかなければならないという現実がある。（親が教えることができない、知識がない）

デイケアセンター（保育所）の保育者は、子どもにとって望ましいと思われる行動の在り方を伝えるということを中心とした保育が実践さ

れている。

この保育は、多くの批判の対象になった、我が国の昭和の保育（平成元年の改訂以前の保育）に類似する傾向が見受けられた。それは、この貧困の地域では、豊に生活している人々と違って、様々な困難に直面していかなければならないという現状を受け入れなければならないという観点からであろう。

電気が無かったり、飲み水や生活水が無かったり、食物が手に入らなかったり、住む家には生活上のあらゆるものが不足しているという状況である。家といつてもトタン1枚、あるいはバナナの葉で作られた屋根があり、壁があるがトイレや浴室などは基本的には整っていない。外から壁の隙間を通して、家の中をのぞき見ることは困難なことではない。

こうした貧しさの中で、前章に示したデイケアの必要が強調され、現実的な子どものケアを必要としていると考えられる。しかし、そのような貧しさの中で、デイケアセンター（保育所）に通うことができる子どもは幸せである。しかし、一方で日常生活をするための衣服が無く、学校や保育所に通うことができない子どもたちもいる。

そのような中で、将来の生活のために、生活の基本を教えることが、デイケアセンター（保育所）の重要な役割になっている。

我が国においても同様に、幼稚園や保育所における教育（保育）の基本は、日常生活に必要な生活習慣を身につけることでもある。それと同様ではあるが、あらゆるものが無いという貧困な状況の中で、生活習慣を身につけさせるというのは大変な役割を担っているといえる。

また、困難に出会ったときに、自分で立ち向かい解決していく、という生き方を身につけさせなければならない。我が国においては「生きる力を身につける」という大きな課題を教育の中心としているが、ここでは、教育の手段や教育活動の一つとしての課題ではない。現実的に今日を生きる、具体的な手段である。

さらに、貧困な地域の多くは、家にトイレが設置されていないので、田畑の一角で用を足すため、「トイレ」そのものの存在を知らないこともある。そ

して、当然使い方を含め「トイレとは何か」を教えていかなければならないという現状である。上手な使い方、正しい使い方以前の問題である。

このような内容を、教育(保育)の重要な内容としている、フィリピンの南の島である、ネグロス島の数ヶ所のデイケアセンター(保育所)の見学から、多くを学ぶことが大切であると再認識した。

我が国の豊かな環境を通して、保育を見ている保育関係者にとって改めて、「保育とは何か」という原点を捉える機会としたい。

(2) デイケアセンターの環境と保育

このネグロス島の保育所では、一日の行動があらかじめ決められていた。保育所に登園後、フラッグセレモニーに始まり、日本で見られる一斉保育の形で、算数の授業、歌、音楽の授業、言葉の授業、お祈り、リズム、そして、おやつの時間とデイリープログラムが決められていて、保育者はそれに従って、きびきびと進めることを誇らしげにしていた。

見学した全てのデイケアセンター(保育所)は、見事に同じプログラムであった。保育方法や保育者の動き(活動)も大変よく類似していた。

保育室にある教材、教具、あるいは施設について眺めると「サリサリ・ストアー」という商店の模型(DCWのハンドブックに、サイズや作り方で支持されているので、どの保育所も同一のものであった)、そして大工道具、ラジオなど、空き箱や木で作られた模型が置かれ、手作りの本箱には数冊の絵本、その他、粗末な黒板に先生用の机と椅子、子どもたちの机と椅子。そして教室の傍らにトイレ、水瓶(飲料水にも手洗いにも使う置き水である)が設置されている。

保育所の建物は、それらの品を風雨から守るためにのみあるかのように、多くはコンクリートのブロックの壁(板を一枚打付けた壁の所もある)とトタン屋根という簡単な建物である。車窓からのぞけば、デイケアセンター(保育所)であることを見逃してしまうほどのものである。このような物的環境は、周辺の地域の実態が大変(異常に)貧しいということが原因となっている。

このような保育施設の中では、品物(お菓子や日常雑貨)の買い方(これは、日本的に眺めれば「お店やさんごっこ」であるが。明日を生きる買物のルールを経験する機会である。)の体験と、衛生的な生活指導の一つとして、トイレの設置の必要性和、その使い方の指導が重視されていることも、大変重要な現実的な保育であった。

もちろんネグロス島の全てが、そのようではない、豊かな生活をしている家庭の子どもたちの通う幼稚園や、保育所ではエアー・コンデショナーが完備され、トイレも水洗式であるという、我が国で体験している通常の幼稚園や、保育所の姿である。



本学学生と一緒に手遊びをする子ども達

こうした環境の違いは、子どもたちの置かれた家庭や、地域の経済力や様々な要因の中で「貧困な地域」の中で生活をしなければならないという点から、これらの地域でのデイケアセンターでは、地域の実情と密着した重要な教育的配慮が見られた。

(3) 何事も厳しい現実の保育

①「おやつ」と「手洗い」

デイケアセンター(保育所)のプログラムには、おやつ時間が準備されており、日本の子どもたちもおやつ時間は楽しみである。

おやつ時間では、全員の子どもたちが各家庭から、様々なおかしとジュース持参する。このおやつは、自由に持ってくるが内容は、ほぼ同様なスナックやクッキー類である。しかし、我が国と大きく異なるのは、全員が同じお菓子を持ってきた

たり、同じ物を与えたりはしないということである。また、持ってきていない子に、園の方から与えるというおやつ時間ではない。すなわち、おやつを持ってこれなかった子は、食べられないのである。

このようにおやつ一つにも、みんな一緒にとか、平等というものは簡単に受け入れることができない生活環境にあるということを、この幼児期から認識をしなければならない、ということも教育において教えなければならないという、我々にとっては困惑する教育も、ここでは重要な内容となる。

同じ物を食べさせるということだけでなく、それぞれが、自分で生きていかなければならないという世界を、具体的に身を以て体験するという一場面である。このような状況の中にあっても、食べる前には全員が手を洗い、着席後、お祈りをして、おやつを食べるという基本的な生活態度が守られ指導されていた。

しかし、ここでは手洗いのための水道はなく、水瓶に貯めてある置き水を使って、保育者が手桶で、水を幼児の手に流し洗うという光景である。そして、一人一人を確認するように、タオルで丁寧に手を拭かせるのである。

「手洗い」は、我が国においても基本的な生活習慣の大切な活動となるが、教師の指示や掛け声だけで「みなさん手を洗いましたか？」「はい！」と、手洗いの状況を確認もしないで、次の作業に流れていくという、耳の痛い指導ではない。貧しい、不衛生な中での生活であるが、すべき事はきちんとするという事であろう。いい加減にすれば、不衛生な中から大変な事態にまで悪化することは目に見えている。そうした厳しい状況も背後にある。こうした指導も厳しさを実感させられる保育である。

②トイレの利用指導

デイケアセンター（保育所）には、保育室の片隅にトイレが設けられている。トイレは、トイレの使い方として大切な役割を持っている。そこには使うための手順があり、おわたたら処理をして、手を洗うことや、身だしなみをきちんと整える等の「身の回りの清潔にする態度を養う」と

いう保育の内容には欠かせない環境がある。

保育者は、トイレに行きたくなった子どものサインをきちんと受けとめ、トイレ指導を行っていた。何事にも全員で、一斉にという価値観はここでは重要でなく、むしろ個々の特性に合わせた指導が、経済社会の不平等性から必然的に派生しているといえる。一斉にトイレに行きなさいという保育は見られなかった。

「勉強とウンチは、人に言われてするものではない」という言葉があるが、自分のことは自分であるという基本的で、重要な保育の観点の一つが、このような排泄の指導の中で実践されている。

貧困な地域では、トイレ自体の設置が少なく、特に一般の家庭にはトイレはなく、主要産業である砂糖きび畑で、トイレを済ませるのは普通である。

③あらゆるものが無い生活

(a) 生活水が無い、食糧が無い

ネグロス島のボライ・モロカボッカ諸島のデイケアセンター（保育所）では、水道や井戸は皆無である。島内が生活水の確保が困難である。そのため水は大変貴重なものとなる。島では雨水を汲み置き、それを日常生活の中で使用している。



保育室に設置された手洗い・飲料のための水瓶

ボライ・モロカボッカ諸島は、3つの島からなり、数千人の人々が生活をしているが、全ての家庭の軒下に、我々の背丈ほどの、大きな水瓶が設置され、雨水を直接屋根から引き入れて、瓶に生活水として貯め置くのである。当然、水は生きるための、重要なものであることを、全員が理解し

て使用するという態度が見られた。

我が国においては、全国あらゆる地域で上水道が整備され、水を飲んで病気になるという心配は皆無であるが、フィリピンでは、あらゆる面でのライフラインの整備が遅れ、生活水もその一つであるが、特に整備の無い島々では、デイケアセンターの保育ガイドラインの中にも、健康の領域として「水を大切に使う」という保育が、絶対条件として共通理解がされていた。

従って、物を大切に生活をするという生活習慣の育成は、人々が貧困の中で助け合いながら生活しなければならないという、重要かつ必然的条件によって、人間関係の中においても「人の心を大切に作る」という、生き方に強く結びついている。それは、障害を持った子供がいても、まったく差別無く自然に関わり、支援するという生活の姿の中に見られる。

また、障害児保育から統合保育、そして、インクルージョンといった、障害教育の流れの中にある社会で、人々が障害を持っている子どもを包み込む生き方をしていた。このようにネグロス島の社会全体が、人々を大切に生きていく中でこそ、インクルージョンという現実を教えられたのもこの島からであった。

心の教育が我が国で叫ばれ、教育の見直しをしている中で、その教育の基本となる島の生活である。豊かな地域に生活している教育者にとって、教育の基本の一つが、生きる喜びを伝えるための環境を見つけることである。そのような教育環境を探るチャンスがこの島には見られた。

貧困な地域に生活している子どもにとって重要なことは、食糧が少なくても、飲み水が少なくても、着るものが少なくても、学校や幼稚園や保育所にいけなくとも、生きていかなければならないという現実に基づいて生活している。

このような地域での保育は、我が国で言う基本的生活習慣を扱っている、領域健康の保育内容が重要な位置を占めているといえる。そして、貧困という現実の中で、食物の好き嫌いをなくさなければならないという保育内容ではない。そこには、食べる物が無いということに対して、幼い子どもが、集団の中で耐えるということを、体験させなければならない保育であり、我が国の教育

では考えられない保育場面である。すなわち、援助には、配慮が必要であることをうかがわせる保育内容といえる。

給食やおやつを平等に、全ての子供たちに与えることができない経済状況の中で、保育の環境や援助は大変厳しい現実であり、保育の内容として「与えられたものは、残さないで好き嫌いをなく全て食べる」といった、領域健康の観点では、全く捉える事のできない保育である。このような保育は、我が国の保育者や教育者は、この状況を体験しなければ到底理解できない場面である。

一方では、この貧困の状況では、野菜や蛋白質の摂取が少ないことから、栄養面での偏りが見られ、体格や体力において問題も見受けられる。この点については、新たな支援計画の中での研究課題としたい。

(b) 保育環境としての、教材・教具が無い

あらゆるものが不足している貧困な地域のデイケアセンター（保育所）では、保育環境としての物的環境の一つになる教材が少なく、紙や鉛筆、クレヨン、はさみ、ノリ等通常の保育活動に必要な教具は極めて少なく、我が国では当たり前のように設置されているオルガンやピアノはもちろんであり、楽器という類の物は皆無に近い。

デイケアセンター（保育所）では、ブリキ缶を利用したドラム、ウイスキー瓶を利用したメロディー楽器、ココナツで作ったカスタネットが教具であった。

こうした何も無い状況であるが、保育者は、粗末な黒板を利用して、英語の学習の為に単語や単語に関連する絵が貼られたり、描かれたりしている。保育者は、一生懸命に形や文字や言葉を教え、子供たちは、生活のために必要な言葉の一つである英語の学習を、我が国の小学校、中学校さながらに学習していた。

ノートなどは高価なために手に入らないが、一枚の紙を丁寧に使い、何度も同じ文字を写していた。その学習の姿勢は、全員が集中し一生懸命であり、ここにも少ない紙を大切に利用する精神が表れていた。

そうした子どもたちの姿に対して、褒めるということとは非常に単純で、我が国の保育での「ねら

い」や「内容」といった観点からの方法とは全く異なる感覚で、書けた喜びや、出来たという達成感や、発達方向性を捉えた援助は少なく、心の温かさを感じた、貧困の島の人々の生活であった。意外であった。

このような保育の内容に迫る発達を捉えた、我が国の保育の実際と、貧困な地域での、保育の内容の違いは、今後の研究課題としたい。また、貧困の地域の、保育者の保育観の意識調査を実施し、環境問題と援助の在り方の違いを、より具体的にし、我が国の保育の参考にしたい。



不足する教材教具をプレゼント

日本の子どもたちや、参加学生が小学校時代に使用していた楽器等のリサイクルである。

—注・引用・参考文献—

- 1) 『世界の幼児教育アジア（阿部洋編）』岡田正章、川野辺敏監修 日本ライブラリー
- 2) 『アジアの文化と教育』権藤與志夫・弘中和彦編 九州大学出版会
- 3) 前掲書
- 4) 『世界の幼児教育アジア（阿部洋編）』岡田正章、川野辺敏監修 日本ライブラリー
- 5) 『現代アジアの教育』中里彰 東信堂 1989
- 6) 『アジアの文化と教育』権藤與志夫 弘中和彦編 九州大学出版会
- 7) 前掲書
- 8) 前掲書
- 9) 権藤與志夫・弘中和彦『アジアの文化と教育』九州大学出版会
- 10) Department of Social Services and Development, SELF-INSTRUCTIONAL HANDBOOK FOR DAY CARE WORKERS, Kaiser press, 1992.
- 11) 前掲書
- 12) 前掲書
- 13) DCW: Day care worker の略
- 14) 前掲書
- 15) 前掲書
- 16) DCS: Day Care Service の略
- 17) 前掲書
- 19) 2002年2月に、第1回現地視察を実施し、地域のデイケアセンターの現状や働きを視察し、現地関係者(国会議員、市長、教育長、市行政担当者、園長、教員)との情報交換を実施した。

同年9月には第2回現地調査と、教育支援の実施のために、専攻科保育専攻1年の学生を中心として現地を訪れ、学生と子どもたちの触合い、保護者との触合い、現地保育者との触合いを通して、学生は現地デイケアセンターでの保育実習を体験することができた。また、支援活動の一環として、不足するデイケアセンターの建設を支援し、計画の進展状況を視察する機会をもつことができた。

A Consideration for Early Childhood Care in the Philippine Islands, Negros — From the Perspectives of Children's Total Health —

Natsume, Tsuneo* Iida, Kazuya*

アジアの諸国に位置しながら、アジアの国々の実情を理解する情報は大変少ないといえる。フィリピン共和国は過去には、300年にわたるスペインの植民地統治下あり、植民地統治を利用したキリスト教布教がされ、さらに、1898年からはアメリカの統治時代に入り、宗教教育は勿論、言葉においても英語教育が始まり、フィリピン人は土着の言葉とともに学習しなければならなくなり、現在では、小学校中学年以上では英語による教科の学習となっている。そうした教育政策の中で、十分な英語力が無いものは中途退学し、経済活動の底辺に追いやられることとなった。

そこに貧困と虐待、搾取など、子どもを取り巻く様々な問題が露出し、貧困と不衛生な環境の中で、社会的価値や生活力を付けるために、就学前の子どものケアが行われるデイケアセンターの役割があり、さらに、そうした家庭の親の教育も同時にセンターの役割となっている。豊かな社会の環境の中での「生きる力」を身に付けるという我が国の保育と、貧困の中に明日を生きるための手段としての「生きる力」を身に付けなければならない保育とを現地調査を通して考察するものである。

キーワード：植民地統治，デイケアセンター，就学前の子ども，貧困，インクルージョン